

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ユゴアの”Les Feuilles d’Automne”における宗教感情について
Author(s)	脇田, 之彦
Citation	フランス文学 , 9 : 22 - 31
Issue Date	1967-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040886
Right	
Relation	



ユゴーの“Les Feuilles d'Automne” における宗教感情について

脇 田 之 彦

詩集<秋の木の葉>に収載された詩篇は、1828年以來、その頃ユゴーの創造的関心の中心であった演劇活動の余暇に執筆されている。それらは、作者自ら序文でく吹く風のままに、偶然にも著者の手渡すページの数々>とのべたように、その制作過程において自然発生的性格をそなえ、いわば徒然の日記か書簡としての資料的価値をもっている。それでも、この詩集の特色であるブルジョワ的内面的性格は、<エルナニ>論争の喧噪から解放された、七月革命直前の1830年5、6月の間に、半ば強迫的に形成されたのも事実である。成程、この間の十六篇のテーマ発現の場は、大別して家庭、愛、交友、宗教及び哲学と多彩に分散している。しかし、それぞれの風土での作者の内部には、比喩的にいえば、子供の叙景を別にすると、夏の残照のなかに秋の暗雲が至るところから出現している。例えば、愛の風景では、妻アデルは現在時における充実した愛の泉とはなりえず、むしろここでの愛は、過去のプリブムを透して湧く悔恨の愛である。また、友人への書簡詩でも、モラリスト風に自己の芸術論や人生論を語りながら、父の死による苦境、世相の混迷を歎いている。この内察と暗い色調への変化には、家族の相次ぐ不幸への内省、妻をめぐるサント・ブーヴとの葛藤が反映しているが、とりわけ革命前後の宗教的疑惑と不安が作用し、それがサント・ブーヴのいうこの詩集での<懐疑的態度の浸蝕>の基調になっているといっても過言ではない。そこで、このレポートでは、必要に応じて日記を参照しながら、問題の詩集をつうじて、1830年頃のユゴーの宗教的精神像をあきらかにしたいと思う。

はじめに、1830年頃の宗教思想についてごく簡単にのべれば、それはおよそ次の三派に分裂していた。まず第一に、ヴォルテリアニズムの理神論は、王政復古の時代に根をおろし、新しく台頭した新興ブルジョワの先陣に立って合理的自由思想を鼓吹していた。この派は王政批判の中心勢力であったと同時に、カトリックのドグマに対しても攻撃的で、それを支持する市民階級は、金融資本の蓄積という実利的関心に眼をうばわれ、貨幣を新しい神として崇めるのであった。第二に、カトリシズムは革命前から王党派と同盟することによって、本来の宗教の聖堂を俗化して危機を招くが、1830年10月に創刊された<未来>紙を中心に結束される。そこでは、ラムネー、モンタランベール、ラコルデールらが中心になって、個人的な狭い領土から宗教を開放し、カトリシズムと自由思想、大衆との共存の条件が探索される。しかし、<未来>紙のこの通俗化、政治的傾向に対して、聖職者の側から多くの非難があびせられ、ラムネーは、創刊の翌年の11月にこれを休刊する憂目に会うのである。こうして、カトリシズムは人心の精神的支柱になるどころか、並に困惑の情をうえつける。ラムネーら三人は、この宗教動乱の採決をもとめてローマにむかうが、

結果は、1832年4月15日付の皇教の回状によって〈未来〉紙に対して、法王グレゴリー16世が有罪の判決をくだすことになるだろう。さらに、以上の理神論とカトリシズムの中間にあつて、ヴィクトル、クーザンに代表される唯心論哲学が、良心の新しい指導者の役割を果さんとして、特に革命後につよい影響力をもっていた。ソルボンヌの教授として研究生を送るかたわら、彼は折衷主義の立場にたちながら、実際には自分がその僧院長であった俗世の宗教のような破壊的思想に反対したのである。

このように7月革命前後の精神的混乱を前にして、その復権を試みたのは主に宗教関係者であったが、それというのも、混乱の根源をなしていたのがヨーロッパ精神の背骨である信仰生活の危機、宗教的不安の感情であったからに他ならない。この宗教的混乱に関してユゴーは、詩集の序文で〈結局、内部でとおなじく外部でも信仰は闘争の渦中にあり、良心は苦痛にみまわれている〉とのべ、新興の宗教、外観をかえた昔ながらの宗教が混迷していることを言及している。また、ユゴーの黙示録の萌芽をしめす作品〈山のうえて聴かれる声〉によれば、神の絶対権が君臨する世界では、〈光栄と幸福の賛歌〉が満ちているのに対し、人間のすむ大地では〈いっせいに飛びたつ黒い夜の鳥〉がはばたき、次のような苦悩の叫びがきかれる。〈地獄の扉のさびついた蝶番のような声…涙と叫び、罵りと激しい非難…洗礼を拒絶する声、呪いと瀆神の叫び〉実際、J. B. バレールによれば、この年代に至って、礼拝生活は儀礼的に実施されるにすぎず、ロマン派詩人の内部には徹底的な懐疑が浸蝕しはじめる。すでに、教会参拝の習慣は時代遅れのものになり、神も死なんとしているかにみえる。こうして、商業市民は貨幣に神の全能性を求めるが、詩人たちの方では、革命を契機にいっそう自己解放の道程へむかう反面、精神の支柱としての神を見失うことによって空虚に浸されるのである。この矛盾した精神状況について、バレールは大略こうのべている。〈理想へとむかった魂の内部に、この荒れくるう解放は空虚というたえがたい感情を残し、詩人たちはその注釈者になるのだった。…しかし、空虚もその身代りである作品も、宗教的魂を満足させることはなく、人間の宿命の問題はかつて以上にその魂にのしかかるのである〉^{註1)}

この時代の風潮は〈秋の木の葉〉の懐疑的傾斜にあちこちで反映しているが、もちろんユゴーは決して神を見失ってはいない。例えば作品 (XII) では、作者の魂は〈懐疑から懐疑へとむかい〉、〈影が空を浸し人生は暗く、不幸がぼくたちの空の光る蒼空に流れでている〉と告白されながらも、結局次のように人間の宿命に身を沈めている。

Cette fatal nuit, que le malheur amène,
Fait voir plus clairement la destinée humaine,
Et montre à ses deux bouts, écrits en traits de feu,
Ces mots; Ame immortelle! éternité de Dieu!

(XII)

大意； 不幸からひき起る、この宿命の夜は、
いっそうはつきりと、人間の宿命をみせてくれる。

その両極に示してくれる、火の筆法でかかれ、
この言葉、不滅の魂と神の永遠を！ >

作品(XXXII) <貧者のために>から判断すれば、ユゴーにおけるキリスト教的福音の摂理は、貧しい者への慈愛と施物の理念であるが、真の意味で最も宗教的な作品は詩篇(XXXVII)の<万人のための祈り>であろう。この詩篇が制作されたのは1830年6月で、ユゴーは当時八才になった長女レオポルデーヌを通じて万人への祈りを表現したが、そこには、1830年頃のユゴーの宗教感情が最も集約的に結晶している。そこで、以後、この詩篇の分析を中心にして論述を進めてゆきたい。構成の面からみて、この作品は10篇の部分にわかれ、それぞれの中心主題は次のとおりである。(1) 祈りへの招待。(2) 母から父へとむかう両親への祈り。(3) 不虔者や放蕩者をふくめて万人、特に死者への祈り。(4) 生者の祈りを必要とする死者の眠る光景。(5) 詩人の祈りへの無力感の告白、次いで娘をとおして詩人は何故悪が存在するかを神に尋ねさせる。(6) 主もわれわれの愛を必要とするからには、主に対して祈らなくてはならない。(7) 聖歌。(8) 詩人の娘と守護天使のまじわる光景。(9) 詩人は、娘に対して純潔を失わないために、現実自己を混ぜないように忠告する。(10) 詩人は、最後に守護天使に幼い娘のよわよわしい人間性をゆだねる。

今作者の夢想の世界では、霧につつまれた夜がやってきて、遠くで一台の車が神秘の使者として影のなかを滑走している。田園、小路、草むらなど全てのものが混りあっては消えてゆき、作者をとりまく自然は疲労してねむり、祈り、愛を要求している。そして街道では、通行人は不安な表情で自分のゆく道に疑問を抱く。子供たちが守護天使と語るのは、こうして現実の悪、疲労、憎悪などのために存在する昼の世界が終り、再びしづかな夜が訪れる頃である。こうした状況設定には、自然を背景とする崇高化というロマンチズムの美的傾向をうかがいうるが、作者にとって子供は、純潔無垢の理想像として大人のすむ現実や死者のねむる夜に対立している。詩人の娘は、<この現実の悲惨、偽りの快楽、虚栄、悔恨>を知らず、ひたすら普遍的に主を恩寵をたまわると祈るのである。なぜなら、地上の人間は、神の完全性に対して欠点と誤謬に蝕まれ、哀れむべき生活に追われているのであるから、ユゴーは第三節で、この現実の人間状況を列挙して、次のような万人の群像のために祈るよう娘に呼びかける。即ち、絹のマントをきてその輝きに歎息している気の狂ったひとのために。善をおこなおうと悪をなそうと、苦しみ悩んでいるひとなら誰でものために。快楽のために朝方まで抱きあった抱擁で身を穢したひとのために。ベールに身を包んだ乙女のために。塔に閉じこめられた囚人のために。夢み瞑想する精神のために。聖なる掟を瀆し、呪いの声をあげている不信心なひとのために...等々。こうした現実の群像を列挙しながら、詩人はとりわけ死者への祈りを勧める。なぜなら、生者は夜明けが訪ずれると、金色の睫毛の臉をあけて明けゆく地平をみることができ、死者は永遠に冷たく重苦しい床に伏してはならないから。死者たちの周辺では天使もコーラスを歌わないし、彼らが生前なしたことの夢が彼らを押しつぶしているから。彼らは永遠の夜の淵をさまよいつづけるのである。ここに表明されるのは死者への憐憫の情であ

り、作品 (VI) と共にユゴーがこの頃から死への固定観念を抱きはじめたことを示しているが、生者ももちろん欠点にみち多くの過失を犯すが故に、無垢の天使の祈りによって自己の浄化が必要である。この人間の不完全さに関して、ユゴーは1830年10月の日記で、神を太陽にたとえ、これを月である人間と対比してこう語っている。〈人間の精神は蒼白な月にている。月には、段階的な変化、不在と包帰、透明さと汚点、全さと消滅を供うものである。月は太陽の光から己の光を借りており、しかも、時には太陽の光を遮断しさえする>²⁾ この断片には、人間がときには満月のように開花するかと思えば、闇夜のように自己存在を消去する姿、あるいは神を呪う姿が比喩的に語られていよう。この人間の不完全さ、盲目性からわく祈りの感情から、ユゴーは究極的に万人への慈愛 *charité*、友愛 *Fraternité*、施物 *aumône* の理念を説くが、一体彼自身の信仰心はどうであったろうか。結論を先にのべれば、娘に対して両親、祖先、死者、万人への祈りを要求しながら、ユゴー自身は信仰の空虚さに害されている。特に第五節は、その頃の彼の宗教的魂の状態を教示しており、そこでは彼は祈ろうとする度に、自己の魂が空虚に浸され、〈誤謬にみち、信仰心を欠く〉のを自覚しているのである。

<Ce n'est pas moi dont l'âme est vaine
 Pleine d'erreurs, vide de foi,
 Qui prierais pour la race humaine,
 Puisque ma voix suffit à peine,
 Seigneur, à vous prier pour moi! (XXXVII)>

大意 人類のために祈るのは
 魂が空しく、誤謬にみち、
 信仰を欠くわたしではない。
 なぜなら、主よ、わたしの声は、
 自分のために祈るだけで勢一杯なのだから>

ここに認められる信仰への無力感は、同じ時期の作品 (XXVII) では、当代の人間の行方に確かな方角を定めることができず、次のような懷疑へと移行する。

<Qui percera vous voiles,
 Noirs firmaments, semés de nuages d'étoiles?
 Mer, qui peut dans ton lit descendre et regarder?
 Où donc est la science? Où donc est l'origine?
 ...
 Que faire et que penser? Nier douter, ou croire?
 Carrefour ténébreux! triple route! Nuit noire!
 (XXVII)>

大意 星雲をちりばめた黒ずんだ空よ。

誰が主であるあたたの帳をつき破るのだろうか？

海よ、誰があなたの床へ降りみつめるのか？

一体、科学はどこにある？ 一体その根源はどこか？

...

何をして、何を考える？ 否定する、疑う、あるいは信じる？

闇に包まれた十字路だ！ 三重の路だ！ 黒い夜だ！>

ここに表現される一連の疑問には、旧訳聖書のヨブの書の表現上の痕跡が認められるのであるが、ユゴーは神を否定し理神論に精神の支えを求め、また神の懐に身を委ねて信仰することもできない。否定と信心の中間にあって、彼は闇に包まれた十字路にたって疑惑に悩んでいるのである。事実、1830年のユゴーはすでにカトリック信者ではない。それに、母が熱心なヴォルテールの理神論者であったことから、彼は幼い時からカトリックの教育は受けておらず、また洗礼も受けていなかった。それが、シャトーヴリヤンのキリスト教的驚異の影響と敬虔なカトリック信者フーシェ家の娘アデルと結婚するに及んで、一時的にカトリックに接近したともいえるのである。彼が王政復古の時代にカトリックであったにしても、それは自己の内部要求からというより、多分に時代と一致して生きようとする配慮に起因している。1830年9月の日記において、彼は、以前のロワイヤリスト＝カトリックの精神構造に修正の筆をくわえてこう記すのである。<1820年のわたしの古いロワイヤリスト＝カトリックへの確信は、10年来の才月と経験を重ねるにつれて少しずつ崩壊していった。とはいえ、わたしの精神には、まだその何物かが存在している。しかし、その何物かも宗教的、詩的廃墟でしかない。わたしは、ときにそれを尊敬の念を抱いて考慮するが、もう礼拝にはゆかない>³⁾ この発言は意味深長である。つまり、王政が、革命後の新時代の政治的、社会的要請に相俟って時代遅れの政体に変ったのと呼応して、カトリック観が以前彼の内部で君主制の運命と結びついていただけに、1830年の科学と思想の進化を前にして、それは旧式の歴史的産物に思えたのである。この点で、彼に残存していたのは福音書の慈愛と施物の理念でしかなく、彼はこの年代に至ってはっきりと教会から遠ざかる。このように、彼が教会と王政から遠ざかる契機をあたえたのはサント・ブーヴと、先の日記の執筆された月に彼を訪ずれたラムネーであったろう。はじめにのべたように、ラムネーは教会と自由思想の融合を試みて、世の聖職者の非難をあびた。ユゴーは1821年以来、彼と交友を結んでいて、その後1832年にラムネーが教皇の廻状によって断罪されると、決定的に教会から離れてゆくのである。もちろん、この教会からの解放も、ユゴーが無神論者に変貌したことを意味するのではない。唯、旧来の彼のカトリック観は拡大解釈をされ、やがて一種のキリスト教的ニュアンスと人道的傾向をふくむ自然神教へと発展する。絶体者神への確信は、例えば1830年9月の日記では、革命後の社会状況が誰の眼にもその輝やかなしい未来を予測できないだけに、こう記されている。<教会は肯定し、理性は否定する。僧侶の oui と人間の non との間において、己の言葉をのべたまうのは神だけである。この言葉とはどんな言葉であろうか？ 人間の理性だけではそれを予測で

きないし、知覚できない>⁴⁾ ユゴアにとって神とは、絶体的唯一者でありながら、あらゆる時、あらゆる場所に姿をみせる神秘的な存在である。神は、人間の住むこの世界にあって何物かであり、日夜人間の間をぬって巡礼している。

<Il est quelqu'un dans ce monde où nous sommes,
Qui tout le jour aussi marche parmi les hommes,
Servant et consolant, à tout heure, en tout lieu,
Un bon pasteur qui suit sa brebis égarée,
Un pèlerin qui va de contrée en contrée.
Ce passant, ce pasteur, ce pèlerin, c'est Dieu!

(XXXVII)

大意 われわれの住むこの世界には
毎日、人間のまをぬって歩き、あらゆる時、あらゆる場所で
奉仕し慰めている。何物かがいる。
迷える牝羊の後をおう、善良な牧人。
国から国へとわたり歩く巡礼。
この通行人、この牧人、この巡礼こそ神だ！>

この世界の巡礼である神は、H. ギュマンによれば⁵⁾、追放後に至っていっそう神秘化され、その本質的性格を次のように示すことになる。すなわち、この世界には何物かが存在しており、われわれ人間はその手中にいる。その何物かがわれわれを常に見詰め、呼びだし、審判するのだ。そして人間の自我は、人間を創り人間の内部に住うこの神を前にして責任を担っている。

以上みてきたように、1830年頃においてユゴアは教会との亀裂を体験したが、そこに表明される懐疑の危機は、同時代の詩人たちに比べればその深度は浅い。それでも、この信仰への疑惑は、1835年に発表した詩集<薄明の歌>ではいっそう深刻化し、

<L'intérieur de l'homme offre un sombre tableau,
Un serpent est visible en la source de l'eau,
Et l'incrédulité rampe au found de notre âme

(XXXVII)

大意 人間の内部は、暗い絵巻を展開している。
一匹の蛇が、水の源泉に見えてきて、
疑い深い情が、ぼくらの魂の奥でからみついている>

と歌い、彼自身懐疑に陥り、これまで価値のあった宗教が腐った死骸になって自己の内部に宿っていることを、次のように告白している。

<Je vous dirai qu'en moi je porte un ennemi;

Le doute, qui m'emmène errer dans le bois sombre,

...

Nous portons dans nos cœurs le cadavre pourri

De la religion qui vivait dans nos pères

(XXXVIII)

大意 ぼくはあなたにいおう、ぼくは内部に敵を抱いていると。
ぼくを暗い森へときまよわせる、あの懷疑を。

...

ぼくらは、心のうちに、かつて祖先のうちに生きていた、
宗教の腐った死骸を抱いているのだ>

この懷疑的態度の醸成、カトリックからの解放には、サント・ブーヴとラムネー、さらにジュリエットとの接近が拍車をかけるにしても、ユゴーの基本的態度は根底から揺ぶられぐらついている程ではない。子供の叙景を歌うときの彼は健康そのものであったし、特に長女レオポルデーヌの成長するにつれて、彼は娘の思念を神へと高揚しつつけるのである。彼は、とりわけ<万人のための祈り>第八節で、娘の祈る光景を次のように美しい詩に定着させる。

<Quand elle prie, un ange est debout auprès d'elle,
Carressant ses cheveux des plumes de son aile,
Essuyant d'un baiser son œil de pleurs terni

(XXXVII)

大意 娘が祈るとき、一人の天使が彼女のそばに立って、
その髪を翼の羽根でなでながら
接吻で涙にくもった瞳をふいている>

この節では、ユゴーは娘に託して愛の必要を説き、神への渴きをいやすが、娘によせる宗教的詩篇については、ラマルチーヌはすでに1829年に、その頃七才であった自分の娘ジュリヤのために<目ざめた子供への賛歌>と題する詩を制作しており、その作品は1830年4月に出版された<諧調詩集>に収録された。また、その十年前に発表された<瞑想詩集>において、ユゴーは久遠に礼拝をたたえた詩<祈り>を読むことができた。しかしながら、ラマルチーヌの作品が本質的に宗教的魂の恩寵を賜らんとする行為を構成し、被創造物の創造主へのまったく自発的な高揚を示しているのに対して、ユゴーの作品では別の性格をおびるのである。つまり、彼の宗教は何よりも人間の宗教であり、詩人が他人や自己自身に対して感じる憐憫の表明なのである。この憐憫の感情が、まったく無垢の存在天使を仲介にして、慈悲ぶかい力への依存の思想を鼓吹する。ラマルチーヌの祈りが感情の吐露であるとすれば、ユゴーの祈りは、ミゼールの祈り、主よわれを憫み給えの訴えであり、現実の悪、誤謬、懷疑自体に対する救済の歎願である。その意味で、この場合、彼の

宗教はラマルチーヌというよりボードレールのすぐ側にある。

ユゴー自身序文で語ったように、詩集<秋の木の葉>には、七月革命前後の社会を反映した<騒乱とざわめきの詩>は含まれておらず、<おだやかで平穏な詩句><家族、家庭の暖炉、私生活をうたった詩句>が主要部分を構成している。そこでのユゴーの視線はメランコリックでじっと現実の苦痛に耐えており、<エルナニ>の勝利に象徴される輝やかしい青春にとっては、思いがけずもそれらの詩篇は、散りゆく花、空から落ちる星、沈む太陽、干草で一杯の街道だったのである。いわばそこには、人生の過渡期を生きる者の過去と未来、期待と失意のまじりあった、不安定で両義的曖昧さが支配しているが、その暗い色調の底流にながれているのが宗教感情をめぐる懐疑的態度、信仰への無力感、生の悔恨などだったのである。ユゴーにとって最初に萌芽したこの傾向は、もちろんこの時点では彼の生を逆転させる程偏執的なものではない。気質的にいって彼は、不毛の絶望の淵でさまようにはあまりに人生を愛した。しかし、だからといって、このことは彼が同時代の苦悩を体験しなかったという意味ではなく、この頃に至って彼は自己の内部に宗教的廃墟を自覚したのであり、この点に関してサント・ブーヴは、<秋の木の葉>におけるユゴーの宗教的精神像を次のように語っている。<空しくも彼は、遠くから恋人に暗い空のなかに<不滅の魂>と<神の永遠>の二重の星を示す。空しくも彼は、長女を人間の父なる神の前にひざまづかせる……。つまり、極めて崇高なく万人のための祈り>も、極めてキリスト教的なく<施物>も苦々しい現実を包みかくすことはできない。詩人はもはや信じていない。永遠の神、迷い苦しむ人類、この両者の間には何物も存在しないのである>⁶⁾このサント・ブーヴの評言には、自らユゴーが懐疑へ傾斜したひとつの拍車の働きをし、当時のユゴーを誰よりも熟知していたにしても、多分の誇張が認められよう。神と人間との間に無信仰の亀裂のみを認めるのは部分的にしか真実でなく、ユゴーは信仰の無力感を自覚しながら万人に対して慈悲を説き、神への渴望をいやさんとしている。しかし、反面、モンタランベールの1831年12月のユゴーへの次の手紙が示すように、ユゴーが宗教体験においてキリスト教の理想へと帰依したと判断するのは、<貧者のために>などの作品でキリスト教的色調を示しているにしろ、それは全一的ではなく誤解といわねばならない。<あるページでは、あなたはご自分の力量を凌いでいらっしゃいますし、別のページでは、あなたは青春の爽やかさ、むしろ少年期の爽やかさを再発見なさいました。最後に、わたしが称賛の念をこめて、神への、主への、キリスト教の理想への回帰に気付いたページがあります。この点は時にあなたに欠けていたものですが、毎日いっそう必要にして慰めの糧となりましょう>⁷⁾

ユゴーの宗教感情をめぐる、二人の評者がまったく対立する見解を示したことは、単に二人が各々の趣向にあわせて解釈を施したからではあるまい。このことは、当時のユゴーの宗教感情の曖昧さ、両義性を示すものであり、一方で信仰心を喪失するかと思えば、他方で人間の有限性、現実の悪への悲歎と宿命感から不滅の神によりかからんとする矛盾

を示すものである。そして、この矛盾は究極において1830年前後にかけて、彼が宗教体験において過渡期を生きたことを物語るのであり、彼の出発当初の公式的なカトリック＝ロワイヤリストの精神構造は、この期に至って部分的に修正を受けるのである。〈秋の木の葉〉の懐疑的な暗い側面こそその直接的反映であり、繰り返していえば、かつてのカトリック信者ユゴーが、キリスト教から受けつぐのは慈愛、施物の極めて現実的な理念でしかなく、ユゴーはその理念をつうじて現実の悲惨を救済すべく説くが、実際にはすでに礼拝にはゆかなかつたのである。もちろん、教会からの解放も、そこから彼が宗教的廃墟に身を沈めているという事実以上の意味を抽出することはできない。H. ギュマンによれば⁸⁾教会とユゴーの間に真に亀裂が生じるのは1849年から1851年にかけてである。それまで教会に払っていた敬意も、1849年に至ってはっきりした敵意に変わってゆく。ひとびとは、彼がその年、一種の恐怖を抱いてカトリック教会から遠ざかるのを見るであろう。そのとき彼は、ファローやモンタランベールの思想と真の人間救済の思想を識別するのであり、彼にとって問題は、ジュアンの悲劇をもたらした人間の悲惨、大衆労働者たちの思いもよらない惨めな状態を如何に救済するかという点にある。彼は、街道で大虐殺を目撃し、ひざにチクトヌ街で殺された子供を抱くにつけ、もはや恐怖の念を抱いてしか、自称<イエスキリストの下僕><偽りの牧師>相場師や銀行家と一味になった教会人を見詰めないであろう。

こうした追放前後との関連からみると、1830年の教会からの解放、慈愛、施物の理念はその最初の痕跡を残していると同時に、とりわけ貧しい者への慈愛の観念は、ユゴーの人類愛の中心思想として発展するのである。

[注]

- 1) J. B. Barrère; Hugo, l'homme et l'œuvre. p. 73~74.
- 2) Journal 1830-1848. p. 16.
- 3) Ibid. p. 13.
- 4) Ibid. p. 17.
- 5) H. Guillemin; Hugo par lui-même. p. 76.
- 6) Œuvres Complètes de V. Hugo. poésie II Revue de Critique p. 155~154 cité.
- 7) Ibid. p.153.
- 8) H. Guillemin; V. Hugo par lui-même p. 70~71.

テキスト及び参考文献

Les Feuilles d'Automne. (Edition Nelson. 1960).

Victor Hugo; Journal 1830-1848 (Gallimard 1954).

Jean-Bertrand Barrère; Hugo, l'homme et l'Oeuvre (Hatier 1952).

Henri Guillemin; Victor Hugo par lui-même (Edition du Seuil 1951).

René Canat; La littérature Française au XIX^e siècle (Payot. 1925).

Fernand Gregh; Victor Hugo, sa vie—son oeuvre (Flammarion 1954).